

グループ全員で西本願寺に参り、他のグループや一般参拝者と共に声を合わせることは、ほとんど新しい経験でした。西本願寺の堂内はとても荘厳な様子で、まるで夢のような雰囲気であり、まさか自分がこのような場所に身を置けるとは思ってもみませんでした。その後、青少年国際研修団の公式開会式が行われました。

午後は広島に移動し、広島平和記念公園と平和記念資料館を訪れました。原爆がもたらした被害の大きさを強烈に実感させられ、とても生々しく現実味を帯びた体験でした。

四日目は、京都に戻り、京都女子大学を訪れ、現役の学生たちと交流することができました。各国のライフスタイルの違いと共通点を知る貴重な機会でした。その後、三十三間堂を訪れ、千一体の仏像を拝観しました。とても似ているのに一体一体が少しずつ違っていることに強く興味を引かれました。

五日目も西本願寺での朝六時の晨朝（お朝事）から始まりました。その後、本願寺の国宝を拝観し、東本願寺や比叡山、親鸞聖人の御廟などを訪れました。これらの訪問を通して浄土真宗の教えについてさらに理解を深めることができ、私自身の浄土真宗への関心がさらに高まりました。

六日目もまた、西本願寺での晨朝から始まりました。その後、奈良を観光し、東大寺、興福寺を訪れ、そして私にとって特に印象深かった奈良公園で鹿と触れ合いました。奈良の寺院

の堂内は、西本願寺の堂内とは異なり、横に広がるのではなく非常に高さがある点が印象的でした。そのため、中に安置されている仏像も非常に大きく、とりわけ東大寺の大仏は高さ十五メートルほどありました。夕方には帰敬式のリハーサルが行われました。

七日目は、いつもの晨朝から始まりましたが、すぐ後に帰敬式が控えていたため、私たちはセミフォーマルな服装で臨みました。ここでは私は法名をいただきました。これは、私の祖母が葬儀のときに初めて法名をいただいたのは異なる経験でした。その後、自分の念珠を作る体験をしました。そして関谷先生との学習会がありました。この学びは、先生が仏教を歩んできた人生経験を交えて語ってくくださったおかげで、浄土真宗の教えに対する私の見方を方向づける助けとなりました。残念ながらご門主さまには急な公務が入りお会いすることはできませんでしたが、儀式を行い、使者を通じてご消息をいただきました。その後、新幹線で東京へ移動しました。

八日目、築地本願寺で晨朝に参拝しました。その後、築地本願寺の案内を受け、青少年国際研修団の公式閉会式が行われました。ここで、プログラム期間を通じて深い絆を結んだ国際的な仲間たちに別れを告げることになりました。互いに感想を述べ合い、ツアーの中で最も楽しかったことを分かち合い、別れの挨拶をしました。その後は、カナダのグループだけで旅を続けました。

九日目は、カナダのグループでの最後の一日でした。買い物を楽しんだ後、青木開教監督の計らいでチームラボを訪れるというサプライズもありました。この日は存分に楽しみ、最後にしゃぶしゃぶディナーで締めくくりました。その後、グループの一人と別れを告げ、ホテルに戻り翌日の帰国に備えました。

十日目、この日、カナダの仲間全員と別れ、それぞれの道を歩み始めました。空港への道のりは長く寂しく感じられましたが、この十日間の体験を改めて振り返り、感謝する時間となりました。

今回の青少年国際研修団ユースツアーは、私にとってとても楽しく、また貴重な機会でした。浄土真宗への関心をさらに深め、その教えに触れることができました。

海外での生活、全く新しい環境、そして世界中の若者たちとつながり、学び合うことで、浄土真宗の門徒であるとはどういうことかをより実感しました。これらすべての経験は、私が今後の人生を歩む上での大切な道しるべとなることでしょう。このご縁に心から感謝いたします。

合掌

トーマス・タマギ・ワカバヤシ

(橋本 日本語訳)

完成した壺を受け取ったとき、彼女は涙を流しました。その壺には、自分と夫が寄せた体の形がそのまま刻まれており、抱きしめるとまるで夫の腕のぬくもりを再び包まれているように感じられたからです。夫はすでに亡くなっていたが、その人がこの世に残した痕跡は確かに存在し続けていたのです。壺を抱きしめたり、花を生けるたびに、夫が再び彼女を抱きしめてくれているように感じられました。そして壺がただそこに置かれているだけでも、それは夫が世界を変え、彼女の人生に今もなお、愛の存在を与え続けている証となったのです。

私は、たくさんのカップルが順番に壺を抱きしめ、その痕跡を残していく映像を見て、とても感動しました。抱き合うたびに人々は自然と笑顔になり、キスを交わしていました。若い夫婦もいれば年配の夫婦もありました。がんの末期を生きる人々も、またお腹の赤ちゃんを抱える妊婦さんもいました。それが最後の抱擁、最後のキスとなる人もいました。しかし、完成した壺を見れば、そこに刻まれたパートナーの存在が確かに自分の人生に深く残っていることを実感できるのです。

これは、まさに仏法が説いていることの一例だと思いました。私たちはみな互いに深く寄り合って生きています。一人ひとりが必ず誰かの人生に影響を与えており、その違いは小さいか大きいかに関わらず確かに存在しています。

その相互依存によって、私たちは決して完全に独立した存在でも、孤立した存在でもありません。

せん。互いに、そしてあらゆるものと「ともに」存在し、「ともに」生かされているのです。そしてそのつながりは、生と死を超えてもなお続いていきます。

私たちはジョンストン氏の未完成の壺のような存在です。柔らかい粘土のように、私たちの形は自分自身の力だけで作られるのではなく、自分を超えたさまざまな力によって形づくられていきます。家族や友人の愛情や支え、周囲の環境や社会、そして最も深いところでは、阿弥陀仏の大きいなる慈悲のはたらきによって私たちは生かされています。

私たちの身体も心も、こうした支えの力によって形づくられた証なのです。もしその支えがなければ、私たちは存在することすらできません。

だからこそ、たとえ時にはつらいことがあっても、鏡に映る自分の姿を見ながら、その背後にある愛と慈悲の力に気づきたいと思えます。カップルが壺を抱きしめている姿を見たとき、私の心は温かくなり、自然に頭が垂れました。そして思わず微笑みながら「南無阿弥陀仏」と口にしていました。

合掌

アシスタントミニスター

ジェフ・ウイルソン先生

(橋本 日本語訳)

青少年国際研修団 (YBICSE) 報告

一〇二五年青少年国際研修団カナダグループの一員として日本で過ごした十日間は、ただただ感謝しかなく、この機会に恵まれたことは幸運でした。

ブラジル、ハワイ、アメリカから来た、私と同じように浄土真宗を抛り所とする多くの若者たちとともに参加することができました。

ユースツアーの最初の一日目は、いわばアイスブレイクのようなものでした。簡単な自己紹介をし合い、大阪万博を見学しながらグループで親しくなる時間を過ごしました。この日はレクリエーション的な要素が強く、グループの一体感を高め、友情を築くことに重きが置かれており、それがその後の旅をより楽しいものにしてくれる土台となりました。

二日目、私たちは大阪の関西空港から電車に乗り、京都へ向かいました。この日は前日の延長のようで、グループで一緒に過ごしながら、西本願寺の近くを観光しました。

三日目は初めて研修団らしい体験をしました。朝六時に起きて晨朝（お朝事）に参拝するのはこの日が初めてでした。

【次ページにつづく】



お子さんたちにとっては、普段は見る機会が少ないお内陣やおつとめの流れを知る良い機会になりますし、大人にとつても、子どもたちの元気な声や存在を感じながらお参りすることで、新たな喜びや活気をいただけることでしょう。

浄土真宗のご縁は、大人になってから急に始まるものではありません。幼いころから大人と一緒に自然に耳にしてきたお念仏や法話が、人生の節目や困難な時に、ふと心に響くことがあります。ファミリーサービスが、そうした場になればと願っています。

どうぞご家族そろってご参加ください。そして、お子さんやお孫さんだけでなく、お友達やご近所の方も誘ってください。九月からこの本堂でも手を合わせ、「南無阿弥陀仏」とお称えするひとときを、みんなで分かち合ひましょう。

南無阿弥陀仏

駐在開教使 橋本 顕正

ボランティアの皆様へ

寺院内外に問わず、トロント本願寺の護持発展に対して、ご尽力くださるすべてのの方々に感謝を申し上げます。 合掌



モミジ定例法要の様子

(第2木曜日 10時半～)

※時間変更になっています

祥月法要のお知らせ

祥月法要とは、祥月命日(故人が往生された月のご命日)をご縁として仏法に会い、阿弥陀さまの仏徳を讃嘆し、報謝の思いでお勤めする法要です。

日時… 九月七日(日)

十月五日(日)

(日本語…午前十時四十五分から)

(英語…午前十一時から)



※英語法要のみオンラインでの配信

オンラインでの参拝を希望される方は、その旨を寺院事務所までお知らせください。 Zoom Link を送らせていただきます。

どうぞ故人が祥月でない方もご参拝下さい。

※四月より日本語の時間を変更しました。

法要後には地下のソーシャルホールにてメンバー同士の交流を楽しんでいただければと思います。

枕経について

ご家族の枕経を検討されている場合は、事前に当寺院の事務所へご連絡いただくようお願いしております。

ご希望の時間を調整し、亡くなられる前であれば、ご一緒に臨終の仏徳讃嘆のお勤めを、亡くなられた後であれば、故人を偲びながら仏徳讃嘆のお勤めをさせていただきます。

メデイクレイション



パトリック・ジョンソン氏は、カリフォルニア州ロサンゼルスの一部であるヴェニスに住む陶芸家です。彼の工房は

「メデイクレイション寺院」と呼ばれています。ジョンソン氏の作品づくりはとてもユニークで、心を打つ方法で行われています。

彼はカップルを工房に招き、そこにはまだ完成していない柔らかい粘土の壺が置かれています。二人はその壺を抱きかかえるように抱き合い、体を寄せ合いながら多くの場合キスを交わします。子どもがいる場合は、子どももその抱擁に加わることがあります。抱擁が終わり離れてみると、粘土の壺は二人の抱擁の跡によってユニークな形に変形しているのです。そこには腕や体の跡が刻まれています。その後、ジョンソン氏は壺を焼き上げ、彩色し、一点ものの大きな花瓶に仕上げます。カップルはその壺を家に持ち帰ることができるのです。

この手法は、実はジョンソン氏の友人から始まりました。彼女の夫はがんを患っており、亡くなる数日前、二人は未完成の壺を抱き合うようにして抱擁しました。彼女がその壺を受け取る準備ができたのは夫の死から半年後のことでした。

【次ページにつづく】

佛心

二〇二五年九月号

浄土真宗 本願寺派

トロント本願寺

お念仏とともに再び歩み出す九月



皆さん、今年の夏はいかががお過ごしでしたでしょうか。長かった夏も過ぎ、九月の風が少しずつつ秋の訪れを知らせてくれる季節になりました。

トロントでの盆踊りに始まり、講師として招いていたステイブンのお寺での盆踊り、ユースグループの一人が通う大学で自主的に彼女が計画したお祭を見に行ったり、キャンプルンビニ、そしてJCBの野球の試合に参加したりなど、振り返ってみると昨年に比べ、今年の夏は色々経験できた夏であったと感じます。

そんな中、八月中旬には、ある大学の宗教学の教授のレクチャーを聞く機会がありました。

それは日本の寺院というある意味で、一般的な家庭とは違った環境に身を置く僧侶たちを研究対象にしたものでした。

レクチャーを聞く周りの皆さんは日本のお寺での生活について初めて聞くようなことばかりで新鮮なりアクションでありましたが、日本のお寺で育ってきた私にとっては、僧侶仲間や自分自身の経験からも頷かされる内容ばかりで、非常に面白いレクチャーでありました。

その中でも教授が日本の宗教、特に仏教を専攻にしていくなかで教えるに着眼するのではなくて

僧侶の生活という点に着目していくようになった理由に「宗教は個人個人を通じて広まっていくものであるからそこを見て見たかった」ということをおっしゃっていたことが大変印象的でありました。

この理由を聞いた時に日本にいた頃、私が大学院の実習で地方のお寺さんにて法話を話す機会をいただいた時にお聴聞していた門徒の方に言われたことを思い出しました。

「私はあなたの面白い話を聞きにお寺に来ていくわけではありません。それなら落語や漫才を聞きにいけばいいでしょう。私はあなたという人を通して阿弥陀さんの有難い教えを聞きたいんですよ。」と。この言葉は今でも私が法話を作る時に意識していることであります。

寺院や宗派といった組織があっても、その教えが人から人へと伝わっていくのは、必ず「個人」という媒介を通してです。たとえば、私たちが仏法に出会うきっかけを振り返ると、誰かの言葉や態度、またはその人の生き方が心に残り、「あの人のようになりたい」「あの人の話をもっと聞きたい」と感じたことが始まりであった、という場合が少なくありません。

親鸞聖人の教えは、書物だけでなく、直接会ったお弟子さんや門信徒を通して各地に広まりました。それは単なる知識といったもの伝達ではなく、「この方が喜んでいるお念仏の教えを、私も聞きたい」という人と人とのつながりによるものでした。

考えてみれば、私たちが日曜礼拝や法要に足

を運ぶ理由も、「あの教えを大切にしている人に会えるから」「あの場の空気に触れたいから」という、温かな人間的な動機があります。

その一つひとつの出会いが、仏法を受け取り、また誰かに伝えるきっかけになっていきます。宗教が「個人を通じて広まる」というのは、机上の理論ではなく、私たちが日々実感している現実なのです。

日本では四月が学校や仕事の年度の始まりですが、トロント本願寺では、この時期に毎年「ラリーサンデー」を迎えます。この言葉は、もともと北米のキリスト教会で使われてきたもので、夏休みを終えて人々が再び教会に集まり、新しい年度の礼拝や日曜学校、活動をスタートする特別な日を意味します。

他のカナダやアメリカの浄土真宗のお寺でも「ラリーサンデー」という言葉を使っているお寺はなかなか珍しいのではないかと思います。実際に私自身はこのお寺で働き始めるまではこの言葉を知りませんでした。

そしてこの九月から新たな試みとして法要について変更があります。毎月の第4日曜日は、「ファミリースービス」として、普段は下の階の教室で日曜学校の学びをしている子どもたちにも、本堂の法要に一緒に参加してもらう形にします。

これは、世代を超えて同じ場でお念仏を称え、阿弥陀さまの教えにふれる時間を持っていたいただきたいという思いから始めるものです。

【次ページにつづく】